

# 文政期「異国船」防備体制と村落上層民の動向

——九十九里浜の場合

岩田みゆき

## はじめに

本研究所では、昭和六十年以来、旧常民文化研究所の研究成果を批判的に継承するため、本研究所の調査・研究として山口徹氏を中心に、房総半島から伊豆半島に至る海域を中心とした漁業・漁民・漁村の史料調査・研究をすすめてきた。この調査・研究は、昭和六十年の千葉県九十九里浜の調査から始まり、その後、同時並行する形で房総半島内湾、東京内湾、伊豆半島と、徐々に範囲を拡大しつつ、かつ重点地域を移行させながら今日でも継続して行われている。その研究成果は、本誌上をはじめ既に各誌に報告されている<sup>(1)</sup>。

本稿は、その調査・研究の過程で、九十九里浜の調査に携わった時に、筆者なりの関心をもって書きためておいたものの一部である。九十九里浜の大地引き網漁業を生業とする海付の村としての地理的・経済的特徴、生産構造、村民の存在形態等については、山口氏らを初めとする先行研究を参照されたいが、ここでは、全く違った角度から九十

九里浜の村と村人について見てゆきたい。すなわち、本稿は、文政八年異国船打ち払い令の発令を契機として開始された、村方における異国船発見情報の伝達、その後に展開される異国船防備体制の編成の特色と村落上層民の動向について、「情報」という視点から村方の史料を使って検討してみようとするものである。

ところで、「異国」「異国船」の問題を村側からとらえていく場合、<sup>2)</sup>「異国」と村・村人とがどのような形で接したのか、「異国」に対する意識が村人の間でどのように形成されていったのかという問題がある。この問題の中には、二つの問題が内包されている。一つは、その意識の形成に権力がどう関与していたかという問題、二つは、権力が直接介入しないところで、村方・町方の問題として異国意識の形成がどのように行われたのかという問題がある。こういった問題について考えるのに、「情報」という視点は、極めて有効であると考えられる。

具体的な方法については、前者について、まずその権力体制を維持しているところの情報伝達システムと経路、そのシステムへの村々・村人の関わり方を追う必要がある。というのは、権力との関係においては情報の内容もさることながら、むしろ人々が領主からの、あるいは領主への情報を伝達するというシステムないし、それに基づいての行為そのものが人々の意識形成に影響を与える場合が多いと考えられるからである。そしてその場合、人々のもっとも身近な生活組織がどのように機能するのか、その中心的役割をするのは誰かということをつかむ必要がある。また後者については、民間の横のネットワークの問題であり、ここにおいても人々の日常的な生活組織がどのように機能するのか、その中で中心的人物は誰か、民間で流布した情報がどのような過程を経た、どのような性格のものであったか、人々がどのように興味あるいは目的をもってそれらの情報に接し、かつ収集したのかということであり、具体的事例に則して、前者との関わりの中で考えていく必要がある。また、これらの二つの問題それぞれについても、同じ村人でも、村落上層民とそれ以外の村人とはどういう意識の違いがあるのか、さらに、漁民や回船業者などいち早く「異国船」の来航を知ることができる海付の村と、直接には「異国船」と接する機会の少ない内陸の村とでは、

どういふ違いがあるのかといった点も考慮にいれる必要があることはいうまでもない。

本稿では、以上の問題のすべてについて検討するものではない。それらのうち特に第一の問題点を中心に考えながら、海付の村の事例を検討したい。すなわち文政期における九十九里浜の異国船発見情報の伝達の実際と、その後に計画された情報伝達網・異国船防衛プランの特色、およびその整備をめぐって展開する村方の動きについて検討する。

## 一 文政八年における「異国船」発見情報の伝達について

九十九里浜は、房総半島の東側に位置する延長五七キロに及ぶ砂浜であり、江戸時代には天領・藩領・旗本領が入り交じった支配関係を有している。本稿で主としてとりあげるのは、そのうち江戸町奉行配下与力給知の村々である<sup>③</sup>。ところで、この九十九里浜においては、文政期頃より「異国船」が近海を通過するという報告が頻繁になされているのであるが、九十九里浜の村人は「異国船」が九十九里浜近海に出現したのをどのくらいの頻度で目撃したのであるか。現在村方の史料で確認できるのは、文政八年三月二十六日・文政九年二月十日・天保三年四月二十七日・同年五月九日・同年六月十八日・弘化二年二月二十九日・弘化三年六月八日の七回であり、この時期かなり頻繁に「異国船」が九十九里近海を行き来していたことがわかる。ただ、注意すべきことは、文政八年二月十六日、幕府がいわゆる「異国船打ち払い令」を出した直後から、村人からの「異国船」発見の報告が開始されている点である。「異国船打ち払い令」は、老中↓町奉行を経て、知行村々に伝達されており、与力の中の給知世話番から村方から選出された給知差配役へと伝達され、「浦々高札」が立てられ、村人に周知徹底されたことは飯高家文書から確認できるのである<sup>⑤</sup>。文政八年三月二十六日以降の報告は、その法令に基づいて行われたものと考えてはば間違いないと考えられるとする、この法令の村や村人に与えた影響の大きさをまず考えなければならぬ——また、その法令の階層による

受けとめ方の相違も考慮に入れねばなるまい。法令にもとづく情報伝達の強制は村と権力とのかかわりをみるうえで重要であり、その伝達の実際を検討する必要がある。

まず、実際どのように異国船来航情報が村側から領主側に伝達されたのかということについて、文政八年の事例から具体的に村側の動きを明らかにしてみたい。文政八年三月二十六日晚六ツ半時、一七、八間位の異国船が粟生村沖に出現した。これは、小倉家・飯高家両家の記録とも一致している。当時の状況をより詳しく記している小倉家文書「異国船粟生浦江相見候節始末書日記」<sup>(6)</sup>には次のようにある。

#### 乍恐以書付奉申上候

御知行所上総國山邊郡粟生村細屋敷村片貝村小関村右四ヶ村役人共一同奉申上候、昨廿六日晚六ツ半時頃異國舟と相見候船隣村真亀沖合い粟生村浦陸地と凡七町沖合迄乗来候由浦住居之もの共本村へ早速相觸候ニ付小前百姓共ニ至迄浦々へ罷出候内右船北東之方ニ乗付船蔭も相見へ不申候、然處小漁船共魚漁稼ニ沖合へ罷出渡世仕候もの共ニ逸々篤ト承糺候所粟生村百姓彦左衛門所持之船水主粟生村源八外三人雇候もの相州三浦郡小坪村八五郎治郎七亀治郎ノ四人乗魚漁稼罷在候処右異国船凡拾七八間位之黒ぬり之船相見へ候ニ付漁業相止メ可逃去ト存候処右大船と小船へ乗移り水主拾人乗追掛来候ニ付打驚逃去候得共不相叶打かぎニ而引被寄セ利不尽ニ乗移り候間驚入候所外ニ子細も無之尚又言音ハ相分リ不申候間何故何國之船ト申義相分リ不申候、無難右船ヨリ大船ニ罷歸り候ニ付早々逃去り申候由ニ御座候

右之段村役人共精々相糺候処前書之通り相違無御座候ニ付乍恐以書付御訴奉申上候 以上

御知行所上総國山邊郡

粟生村

文政八酉八月廿八日

細屋敷村

片貝村

小関村

右四ヶ村総代粟生村 与頭 伊兵衛

豊田一郎兵衛殿

小川治兵衛殿

飯高貫兵衛殿

豊田重三郎殿

飯高惣兵衛殿

この史料によると、まず異国船を目撃した「浦住居之もの」から本村への報告があり、その報告をうけて小前百姓まで海岸に出てみたところ、船は北東の方角に去って確認することができなかった。そこで、沖合いで漁をしていた粟生村水主源八他、雇われ人であった三浦郡小坪村の水主三人に様子を聞いたところ、漁をしている最中に異国船と出くわしたことが、小舟で乗りかけてきて何かを話しかけたことなどを証言した。それについて村役人でいろいろ問いただして間違いがないようなので、異国船発見地である粟生村の組頭が与力給知浜付四村を代表して、給知差配役へ報告書を提出している。二十八日、給知差配役で宿村名主である小川治兵衛と粟生村組頭伊兵衛は出府し、小川治兵衛から給知定世話番中島三郎右衛門へ異国船来航一件を注進し、伊兵衛へ一通りの問いただしがあつたうえで、夜五ツ時過、定世話番中島三郎右衛門・嶋喜太郎から町御奉行榊原主計頭へ報告する。同日二十八日榊原主計頭より月番老中松平和泉守への進達書が作成された。同時に、給知定世話番から飯高貫兵衛宛の給知村々への「手当御下知書」

が小川治兵衛にことづけられた。

小川治兵衛と伊兵衛は二十九日早朝「浦々為手当臨時組合村々へ申触致手配置候様被仰附」<sup>(7)</sup> 帰村する。三十日、給知定世話番から飯高貫兵衛にあてた二十八日付けの書簡が飯高家に届けられたことが、飯高家の記録に確認される。これには、それほど詳細な指示はなく、今後とも異国船がくるかもしれないので、給知村々で申し合わせ、上陸したら防戦するように、天領や私領とも協力するように、その場合最寄り村々で相対で掛け合うようにとの指示のみであった。二十九日小川治兵衛は帰村と同時に宿村組頭小倉伝兵衛に、御鷹霞組合・臨時組合・異国船来航手当などの調査命令を出している。小倉伝兵衛は、この命令に答えて、即座に片貝村霞御鷹場組合・臨時組合村々の調査を行い文書を提出している。以後、次節でみるような村落上層民を主体として村々の情報伝達組織を含む警備体制の整備が始まるのである。

文政八年の場合をみると、三月二十六日異国船発見から老中へその事実が伝わるまで、約二日しか要しておらず、実にすばやい対応がなされたといえる。また、給知定世話番から村方への指示も、内容的には不十分ながらも、即日なされている。このように、文政八年の異国船発見情報注進は、村方における浜方から本村の村役人へといった情報伝達組織、与力給知における支配体制、すなわち村落上層民出身である在府と在村との両給知差配役の存在と、与力の中の給知定世話番との巧妙な連携によって、実にすばやく伝達されたのである。

ところで、この一件で他領の村々ではどのように対応したのであろうか。片貝村の小川家文書<sup>(8)</sup>によると、同年四月に次のような文書が作成されている。

乍恐以書付奉申上候

上総国山邊郡片貝村奉申上候、異国船之義ニ付當酉二月中御觸之趣委細承知奉畏候、然處去ル三月廿六日曉異国

船當浦陸地近く乗入候ニ付其段先達而御訴奉申上候通り其節者早速無不戻し候得共此上萬一上陸可致義も難斗ニ付村近邊村々之榑原主計頭様・筒井伊賀守様而御組与力給知ニ御座候、榑原主計頭様御給知村々者其御懸り別段異国船防方打拂又者搦捕候助力手當之義被仰渡候由ニて右御給知拾八ヶ村之義者異国船防方助力申合等仕右拾八ヶ村之内粟生村濱辺江半鐘を釣置異国船相見へ候得者右半鐘打鳴聞付次第村々人夫相集猶又其節大勢之人数混乱不致様其外種々取極議定仕置候由風聞及承申候、……右ニ付私共村方之義も此度御伺奉申上候、被仰付次第異国船防方助力手當等仕度奉存候、尤私共村方之義者前々近村共九ヶ村申合組合御用御差支無之様且又組合村之内何様之変事出来候共其節之諸入用助合可致旨申合組合罷在其内私共村之義者村高も多事故觸元村へ被相頼右廿九ヶ村申合議定仕置候義も御座候間右村々助力等之義も此度御伺之上奉御下知受異国船防方助力手當之義如何様共被仰付次第取極申度奉存候、……

文政八年

西四月

上総国山邊郡 片貝村

本間佐渡守知行所 組頭 源七

長谷川平藏知行所 年番名主

源兵衛

森覚藏様御役所

前書之通當村申合一同御代官森覺藏様御役所江御伺奉申上候ニ付此段御訴奉申上候 以上

文政八酉年

四月

片貝村



組頭 藤左衛門

庄兵衛

長兵衛

仁佐衛門

名主 助右衛門

多古

御役所様

この文書の前半は、支配関係の錯綜している片貝村の中で、本間佐渡守知行所と長谷川平藏知行所の村役人から代官森蔵宛に提出したものである。三月二十六日の異国船発見の時の情報伝達については詳細な記載がなされていないため、どのような対応をしたかは不明であるが、おそらく与力給知でみられたような敏速な対応はなされていない。またこの文書によると、両与力給知が異国船発見の節の合図の方法をはじめとする詳細な取り決めを行ったという「風聞」を聞いて、本間佐渡守知行所と長谷川平藏知行所の片貝村でも異国船発見時には助力したいこと、また片貝村は、触元でもあり、組合二十九ヶ村に直ぐに協力を伝達することができるので、異国船防方助力手当について指示がほしい旨の伺い書を幕府代官に対して申し出ているのである。またこの文書の後半部分からは、全く同じ内容のものが同時に多古藩領の片貝村の村役人から多古御役所にも提出されたことがわかる。

このことからすると、他領においては、文政八年当時いまだ具体的な対応・動きがなされておらず、与力給知の動きを「風聞」で聞いて初めて対策を考えているのである。文書中「給知村々者其御懸り別段異国船防方打拂又者搦捕候助力手當之義被仰渡候」とあることからわかるように、町奉行与力給知においては特別に早くから異国船対策がなされていたのであり、その動きをみながら、周辺の他領村々も対策を講じる動きをみせたのである。



与力給知の村々が他領に先駆けて海防対策を練っていたことは、次の史料からも伺える。

……唯今ニテモ戦争始ニ事々敷防禦之手當有之候ハ、失費而已相掛……要地之儀ハ格別其外輕キ備場所等ハ勘弁之取計モ可有之哉番兵等差置候而モ交代之者無之候而ハ不相成タトエハ百人用意千人之場所ハ二千人之用意ニ相成候ヘハ莫大之費用可相掛當時困窮之領主ハ中々以テ永續ハ仕間敷哉ニ付屯田之常詰ニ平日ハ耕作ヲ致候事有之時ハ兵卒ニ相成候様ニ茂仕候ハハ便利宜敷可有之候ヘトモ是モ可割渡田地無之而ハ差支可申哉ニ付其場所之者共町方ハ町人在方ハ百姓ニ而モ事有ル時ハ兵卒之助ケニ遣ヒ候所置モ可然哉左候ヘハ侍以上徒歩足輕等多人数不差置共一廉之備ニモ可相成哉……唯々平日異国人与申者ハ人ヲ欺キ人ヲ侮リ可惡者与申儀能々申諭百姓町人共迄異国人憎ミ日本之恥辱ヲ取間敷与申心ヲ生ジ候様教候而……<sup>(9)</sup>

これは、文政七年に当時の南町奉行筒井伊賀守が老中大久保加賀守へ提出した海防に関する有名な意見書であるが、これによると町奉行では、既に文政七年段階で、武家の負担を軽減するために、海防上それほど重要でない場所については日常の警備には村民を利用して海防を行おうという考えを持っていたことがわかるのである。しかしながら実際には村人は兵卒の助けくらいにしかならないのであり、何か起きた場合にはすぐに幕府方に連絡がとどくようにしておく必要があったと考えられる。とすれば、町奉行与力給知が他領に先駆けて情報伝達組織をはじめとする警備対策を練っていたであろうことは容易に推測できるのである。また、注目すべきは、後半部分であって、異国人を悪人と思ひ込ませれば村人がかれらを憎み海防の役にたつであろうと謂っている点は、幕府による情報操作の意図をよくあらわしている。

以上みたように、文政期与力給知においては、村から幕府への情報伝達は実に素早い対応がなされたのであるが、

そのいちばんの理由は、九十九里浜という組織的な大地引き網漁業地帯であり、海と陸との情報伝達が日常的組織の中で出来ているということ、また給知差配役といった多くの場合地引き網の網主であり、かつ土分を与えられた村落上層民が、領主との間にあって、在地の村役人との連携によってすばやい伝達を行っていたためである。

次節では、この村落上層民が主体となって計画した九十九里浜における異国船警備プランについてみてみたい。

## 二 村方における異国船防衛プランについて

ここでは、文政八年二月を契機としてどのような防衛体制が村々で計画されたのかということを、飯高家と小倉家の事例をみながら検討してみたい。警備プランについては、文政八年四月以降数回に分けて考案されているため、どれが最終的に採用されたのかということははっきりしていない。あるいは、計画のみで、実際にはそれほど機能はしていなかったのかもしれないが、それにしても村落上層民がどのような村方における組織化を考えていたのかということについて検討しておく必要があるだろう。

### ①飯高家のプラン

まず飯高家が主導して計画したと思われる異国船発見通達直後の文政八年四月一日の「異国船防方相圖御請證文之 夏」から検討してみたい。

……片貝村粟生村浦江半鐘釣置異国船乗寄セ候ハ、両村之内半鐘打鳴尤風雨之節者上郷江相通不申候儀も可在之候間宮村小関村枝郷大抜村ニ而も半鐘用意いたし置打鳴候而村々は相通し右両村之内半鐘之相圖次第是ヲ継昼夜ニ

不限六十歳ヨリ拾五歳以上ヲ早走ニ粟生浦片貝浦江懸付可申候、異国人上陸いたし候浦ニ而ハ玉火ヲ拵置眼印ニ揚之昼ハ煙ヲ揚右ヲ眼當ニ其所江欠寄可申候、尤村中人数相集候場所ハ兼而取極置夜中ニ候ハ、兼而用意仕置ニ而人数相揃手々ニ松明炊建名主与頭付添欠出人数他村之者江打交リ之者ニ而散乱不致様專要ニ心懸且又村内欠出之跡老人子供等相残村内高キ場所ヲ見立沓村ニ式三ヶ所宛大篝ヲ焚人数引取候迄ハ不消様可致候、是等之焚物等ハ右場所江平生積置用意可申且又浦付村々ニ而者昼夜ニ不限遠見之番人ヲ付置見懸次第半鐘ヲ打鳴、昼之内ニ候ハ、祭禮之節之幡ヲ相立尚又煙揚可申候、相図怠無之様相勤可申候、尚又網方并小漁船共水主相集置持合之幡等松林之中江立置夜中ニ候ハハ不□所々□篝ヲ焚大勢相集候躰ニ上陸不致様心懸可申候

(飯高家文書「文政八酉年二月諸用留式番」<sup>(10)</sup>)

この証文には、異国船を見かけた場合の合図の仕方、人足の詰め所など異国船来航時の具体的な対応が計画されている。これによると、異国船を発見した場合は、片貝村・粟生村に設置した半鐘を打ち鳴らし周辺村々へ合図すること、ただし風雨で内陸の村に連絡が取れない場合もあるので、間宮村・小関村・大抜村は昼でも夜でも十五歳から六十歳のは、粟生浦・片貝浦へ駆けつけること。異国人が上陸する浦では、「玉火」をうちあげ、合図すること。それを目印にして周辺村々は駆けつけること。ただし、村の中で集合する場所はあらかじめ決めておくこと、残った村人は、一村に二、三本のたいまつを焚くこと、日頃そのための準備を怠らないこと、村では日頃から昼夜ともに番人をつけ、異国船をみかけたら半鐘で合図をし、昼は祭礼用の幟をたて、煙をあげることに。夜の場合は、ところどころで火を焚き、上陸しないようにすること、など半鐘・狼煙・幟などをつかった異国船発見時の連絡方法がことごとまかに記載されている。

飯高家の記録の中で最も体系的にプランが出て来るのは、文政八年五月から九年にかけてのことである。

まず文政八年五月に御給知役に宛てて作成された「異国船乗寄候節手当之儀ニ付申上候書付」<sup>(11)</sup>をみると、鉄砲打人の選定と稽古場所、玉薬の支給願ひ、沖見張り番小屋建設援助金支給願ひ、また番人への扶持米支給願ひ、異国船来航の節の半鐘の打ち方、高張・松明は村入用で準備するが、鐘は貸与願ひたいこと、御出役在の節の炊出しについてはいまだ未決定であることが記されている。続いて、異国船が乗り寄せた時の人足詰場・各村ごとに六十歳以下十五歳以上の人数と竹鐘の配分数が記載されている。続いて文政九年五月十二日付けの「乍恐差上申御請証文之事」<sup>(12)</sup>では、粟生村をはじめとする十三村から給知役に当てて、合図の半鐘の設置場所・数について記している。

飯高家のプランの特徴は、次第に海岸警備にかかる費用や負担の軽減に向けられるようになり、幕府の海防体制への協力が消極的になっていく点である。後述のごとく飯高家では、幕府の海防体制へどこまで援助するのかという点、また防衛プランの点でも小倉・小川家と意見対立もあり、防衛体制についてはこの後両家に主導権を握られることになる。したがって、これ以降は具体的な防衛プランを出した記録はほとんどみられなくなる。

## ②小倉家のプラン

前項でみたように、文政八年三月の異国船来航通達の直後、宿村名主で給知差配役である小川治兵衛と粟生村組頭伊兵衛が、「浦々為手当臨時組合村々へ申触致手配置様被仰付」<sup>(13)</sup>との命をうけた小川治兵衛は、帰村直後に宿村組頭の片貝村霞御鷹場組合・臨時組合村々の調査・異国船来航手当などについての調査命令を出している。それに答えて、伝兵衛は即座に調査を行い、報告書を提出している。<sup>(14)</sup>片貝村霞御鷹場組合は、総高一万二千二百八十石で、村役五十カ村組合で構成されている。この中には、南北与力給知の他に、天領大名領が多く入り組んでいる。また、臨時組合<sup>(16)</sup>の方は、南北与力給知と旗本領一村、天領一村を加えた三〇カ村からなる組織で、「火難其外臨時変難有之候節諸入用助合並人歩手当等触当次第無差支差出候筈組合議定致置申候」<sup>(17)</sup>ものであった。これらの組織は、内陸

村々への情報の伝達や人足・鉄砲竹槍その他の物資の調達に利用された。非常時には、内陸村々からも駆け集まり、地曳網の組織を中心に組織化されていくことになるのである。

では、伝兵衛がたてたプランとはどのようなものであったのか具体的にみてみたい。次の史料は文政八年三月晦日最も早い時期に計画されたものである。

上総國山辺郡真亀村より同郡小関村迄の浦方、此の上、異国船見之申し候節、村々浦方へ相詰め候様もうし触れ候。相因ニハ、右浦方村々の内、地曳網魚屋拾七軒之れ有り、右真亀村より小関村迄道法凡そ壹里の内ニ之れ有り候ニ付き、右なや共へ隣村の寺より半鐘借り受け、四ヶ所斗りへ掛き置き、異船見掛ヶ次第、右半鐘式ッ拍子ニ打ち候ハバ、外拾三軒の魚屋へハ番木掛ヶ置き、是れも式ッ拍子ニ打ち置き候ハバ、岡方村々聞き付け次第、昼夜に限らず（欠字）或ひハ竹貝吹き候ハハ、早束村々より人足<sup>（様）</sup>操出し、左の通り、地引網魚屋前へ、村々才料相詰め申すべく候。地引網なや番ハ異船見掛り次第、はまヲ呼ばせ候様、式声つつ呼び申すべし、殊ニ右様（欠字）地引網水主共、夫れ夫れ差図請け候様致すべき事。

ここには、異国船来航の村々への通達についてかなり組織的な伝達網が考案されている。続いて、通達をうけた各村々の人足の詰め場が具体的に示されている。

不動堂村

詰所迄凡そ三十八九丁

覚兵衛なや前へハ

（不動堂村  
北幸谷村

水主の分ハ何村より勤め候と  
も夫れぞれ附来り候留りより

相詰め申すべし

西野村

九兵衛なや前へハ  
同断

貝塚村

喜太郎前へハ  
同断

粟生村

重兵衛なや前へハ  
同断

同村

俊治郎なや前へハ  
同断

宿村

新兵衛なや前へハ  
同断

片貝村

並に村人足ハ夫れぞれ村方最寄へ相詰め申すべし

西野村

幸田村  
詰所迄凡そ三十一式丁

貝塚村

広瀬村  
詰所迄凡そ三十二丁

細屋敷村

藤下村  
詰所迄両村二十丁

粟生村

関下村  
詰所迄二十四五丁

大沼村

宿村  
詰所迄凡そ二十五六丁

弥兵衛なや前へハ  
同断

同村

同断

弥右衛門なや前へハ  
同断

同村

同断

弥市なや前迄へハ  
同断

同村

同断

甚兵衛なや前へハ  
同断

同村

薄島村  
荒生村

家徳村  
殿廻村  
詰所迄

中野村  
三門村  
詰所迄凡そ二十二丁

高倉村  
宮村  
詰所迄両村より三十二丁

同断

惣兵衛なや前へハ

（三浦名村  
堀之内村  
同断

同村

同断

与左衛門なや前へハ  
同断

上武射田村  
詰所迄三十三丁

同村

同断

吉太郎なや前へハ

同断

関内村  
詰所迄凡そ三十丁

同断

重右衛門なや前へハ  
同断

中村  
詰所迄廿三四丁

田中荒生村

同断

小関村

六郎左衛門なや前へハ

小関村  
同村新開

両村とも三四丁より  
十八九丁

治郎右衛門なや前へハ

（田中新生村  
下武射田村  
詰所迄三十壺二丁

続いて、右村々のうち地曳網船・小漁船を持つものに対しては、次のように各地引き網船に小漁船を付け置くようにして行動するように計画している。

右

覚兵衛船へハ

不動堂村縄船持

西ノ村

吉十郎  
権四郎



右

九兵衛船へハ

同村

助七

由兵衛

右

喜太郎船へハ

藤下村

伝吉

貝塚村

善兵衛

右

重兵衛船へハ

粟生村

たれ

但、縄船持名前取調べ候上

にて認書載せ申すべし

粟生村

俊治郎船へハ

片貝村縄船

三艘附添

同村

九八郎船へハ

右村縄船

式艘附添

宿村

新兵衛船へハ

同村同

三艘附添

片貝村

弥兵衛へハ

同村同

式艘附添

同村

弥右衛門船へハ

同村同

三艘附添

田中新生村

治郎右衛門船へハ

同村ハ

式艘附添

小関村

小関新開ハ

六郎左衛門へハ

小セキ

久治郎  
七兵衛  
清八

田中新生村

与左衛門船へハ

小セキ村 久七

片貝村より壱人

右の通り地引船へ小獵縄船附け置き、海上働き申しつけ置くべく候ハバ、私共組合村々より浦続き南北浦々へも通達致し置き候ハバ、大体の儀ハ差支之れあるまじく存じ奉り候。尤も、九十九里浦の儀ハ遠浅故、大船岸迄ハ附き申さず、凡そ八九町陸迄之れある場所迄の儀ニて、海荒れ候節ハ、廿町余りも之れ有る場所ニても掛かり兼ね、風立ち候節ハ、遠沖へも掛り兼ね候海面ニ御座候。極くしずかなる節ニても、八九町沖よりは小舟ニて上

陸致さず候てハ上り兼ね候。大勢一度ニ上陸し兼ね候浦柄ニ付き、右の通り手当致し置候ハバ、格別の難渋も之れ有るやニ恐れ乍ら存じ奉り候。

ここでは、日頃から地引船に小漁網船を付けて漁業をしていれば、異国船が来たときでも九十九里浜全域にすぐに連絡ができるであろうとしている。

以上にみた史料からするとこの段階では、まだ「異国船私共浦へ相見え候節」の段階であって、内容的にも、異国船発見の情報の伝達組織が重視されていることがわかる。この段階では実際に異国人が上陸し、対戦する場合のことは具体的には考えられていなかったようである。ただ、この段階ですでに、村方人足の詰場や漁船の出動準備が細かく決められている点は注目できる。特に注目すべき点は、九十九里浜の主要な生業である地引き網の組織がそのまま利用されている点である。前項でも、異国船発見時の素早い情報伝達の実例をみたのであるが、地引き網漁業は、本来組織的漁業であり、またこの警備体制を積極的に推進しているのが地引き網の網元であったため、海上警備についてはこの組織を利用することがもっとも効果的だったのである。小倉家自身は、文政十二年以降地引き網の世話役をしている記録があるがこの時期はまだ地引き網網元ではない。だが、網元であった小川治兵衛の後押しがあるためこの計画ができたのだと思われる。

また、文政十一年五月には「文政十一子年異国船防ぎ方の儀、御地頭所より御老中へ御伺ひ済みの上、村々へ仰せ渡され候御請証文左の通り」<sup>(19)</sup>から始まる証文が小倉家文書中に残されているが、この史料のおわりに、「当子異国船乗り寄せ候節人足配方左之通り」と題して、宿村村民の役割分担・年齢が記されている。それによると、村人を一番手三十二人、二番手三百二十三人に編成し、それぞれ罫六筋持出し人六人、幟持一人、高提灯持一人、平人足十八人、本村飯焚一人、本村弁当持二人、浜新田飯炊一人、浜新田弁当持二人として村内の十五歳から六十歳までの村民に割

り当てている。この中には、家の当主の他に倅・家内・弟・地借とあるものが三十七人割り当てられている。それにしてはかなり一村をあげて村人一人一人にいたるまで詳細に組織化されていたことがわかる。

以上二つの事例をみたのであるが、特徴としていえることは、①まずプランの性格についてであるが、この文政期に計画された警備プランの主眼の第一は村方における情報伝達網の整備にあったということである。異国船が来航したときに、いちはやく情報を伝達し、防衛体制をしくための、九十九里沿岸村々の横のネットワークの編成プランであったのである。②また、異国船警備体制として、九十九里地帯の経済を支えている地引き網の組織や、災害用の臨時組合の組織など、村人の日常生活を支える組織が利用されている点である。③そしてこれらのプランを村落上層民が主体となって計画したということである。とくに経済組織の利用が可能であったのは、プランを練った飯高家、また小倉伝兵衛にプランをたてさせた小川治兵衛もまた大地引き網の網元であったことからわかるように、村落上層民が地引き網の網元であり、多くの水主の動員が可能であったためである。幕府・領主はこのような層を掌握することによって、在地の警備を実現しようとしたのである。④しかしながら、同じ与力給知の村々でありながら、それぞれが異なったプランを独自に提示している点である。飯高家文書にみられるプランと小倉家文書にみられるプランとを比較すると、内容の大半は類似しているが、飯高家文書の記載は必要経費の問題、どこまで村方でもつかという村の財政とのかかわり、地引き網経営との兼ね合いを常に考えながら計画を立てていたようで、海防よりは、村や自らの経営を守る立場をとったといえる。それに対して、小倉家のプランは村の財政や、個人の経営についてはあまり頭がなく、海防体制を最優先に考えたプランであったようである。したがって、具体的なプランについては小倉家のほうが人足の詰め場の設定ひとつをみても、詳細な計画をたてていたようである。

このように、防備体制の編成をめぐる、村落上層民の間で異なった考え方が存在していたことがうかがえる。その点については次節で検討したい。

### 三 異国船防備体制編成をめぐる村方の問題

文政八年異国船が九十九里沖を通過した時に、粟生村をはじめとする与力給知村々はすばやい対応で、老中までの情報を伝達した。その後、異国船来航時の警備体制・情報伝達体制の整備について積極的な動きがみられ、領主の命に従い、村落上層民を主体として組織化がはかれることになった。その過程で、村落上層民間においていくつかの意見の対立が発生している。

まず、飯高家に残された記録からみてみたい。飯高家では、文政八年三月二十八日、異国船来航の報告を請けた給知定年番役中島三郎右衛門・嶋喜太郎からの、他領村々ともに防方を相談せよ、ただし相対で掛け合うようにとの指示を得て、三十日に知行村々を集めて集会を開いている。そしておそらくその会議においてある程度の防ぎ方が決められ、先に検討した四月一日付、「異国船防方相圖御請証文之事」が知行全村々連名で提出されている。

この請け証文は、粟生村はじめ北町組与力知行村々一八カ村連印のうえで、一日の夕方に村継で、九十九里の知行所中比較的江戸に近い松之郷村の名主を介して江戸に差し出されている。この請け証文の内容について、四月二十日中島氏から質問があり、江戸の在府代官豊田父子から在地代官飯高父子に質問状が届いており、そのことからすると、この四月一日提出の請け証文にみられる計画は、飯高家を中心となって計画されたものではないかと思われる。また、在地側からの提出書類は、在地代官である飯高家を通して在府代官たる豊田氏に提出され、そこから給知差配役、領主に伝達されていたことがわかるのである。

四月二日には、異国船防ぎ方のための人足を把握するため村々の六十歳以下十五歳以上の人数の取調べが行われ、同時に作田・小関などの周辺村落へ協力を要請し、五日承諾をえている<sup>(20)</sup>。以上が飯高家の動きである。

一方、小倉家の記録から動きをみてみよう。既述のごとく、三月二十九日小川治兵衛と粟生村組頭伊兵衛が「浦々為手当臨時組合村々へ申触致手配置」くよう命ぜられて帰村し、その日の内に小倉伝兵衛は、小川治兵衛から、村々御鷹場組合村々・地頭姓名、および臨時組合村々の調査と、異国船来航時の手当致し方を認めて提出するように命じられている。伝兵衛はその命に従い、調査結果を絵図面とともに提出している。

一方、三月三十日には、豊田一郎兵衛・重三郎宛で伝兵衛から直接漁船出動準備について文書を提出している。<sup>(21)</sup>飯高家の記録では、前述のように三十日に集会を開き、一日に請書を作成したとあり、おそらく宿村伝兵衛も出席したであろうから、三十日伝兵衛から豊田に提出したプランは、飯高家とは別個に作成されたものではないかと考えられる。それは、粟生村の網船持ちを書く欄が空白になっていることから予想できる。また、先の四月一日の請書が在地代官たる飯高家から在府代官たる豊田に宛てたものであることは既に確認したが、この三十日の伝兵衛から豊田宛ての書類が伝兵衛から在地代官を通さず、直接豊田宛てになっている点は重要である。つまり、伝兵衛は、飯高家に無断で独自にプランを練って豊田に提出したことになるのである。ここに、異国船防ぎ方プランを立てるにあたって村方において、二つの異なった動きを確認することができる。

その後四月二十九日には、宿村伝兵衛ら地引き網持を初めとする六人の網持による、大久保加賀守命による東海岸御備場御用のため河久保忠八郎・佐藤清五郎ら廻村の節の炊出し御用願いの提出がはかれる。これは、下書きの段階で飯高貫兵衛に打診され、そこで飯高家によって反対され、延期となるのである。

その経過をみると、まず、四月二十九日次のような願書が宿村において作成される。

御知行所上総四ヶ村地引網持六人一同申上げ奉り候。当西三月下旬、粟生村沖へ異国船相見え候ニ付き、其の節御訴へ申上げ奉り候所、此の上も乗り来り候やも斗り難く、……当四月廿六日大久保加賀守様御下知の趣にて、

東海岸御備場御用の為め、河久保忠八郎殿佐藤清五郎殿御通行の節、御調べの上、猶又此の上の手当等閑之れ無き様仰せ渡され候ニ付き、四月廿八日（欠字）夫れ夫れ手当申し合わせ候由ニ御座候。……釜場等之儀（欠字）釜場差渡し三尺五寸より三尺八寸迄四ヶ村の内ニ凡そ八拾釜程も御座候。右に准じ、御向様並に私共地引網組合、網持並に商人ニてハ、釜数都合三百釜程御座候。大勢の御出役様御逗留ニても御差支も之れ有るまじくや。殊ニ網持六人の蔵、魚屋並びに商人共魚屋蔵等も、御陣屋の御用ニも相成り申すべくや。是れ迄地引網持釜場商人一同無難ニ渡世致し来り候冥加の為め、私共最寄内へ御出役御座候節ハ、右地引網持並に商人共焚出し御用仰せ附けられ下し置かれ度願ひ上げ奉り候。……<sup>(22)</sup>

この願書は飯高家に見聞にいれたが、飯高家では江戸御役所に伺いの上で返事をするとして保留としているが、次の史料では、飯高家がこの宿村名主らの動きに反対であったことがうかがえる。

五月朔日村継キ以差出候伺書之寫

四月廿六日異国船御備為御用御吟味方下役佐藤清五郎様御普請役元ノ格河久保忠八郎殿東海岸御廻村浦付村々最寄々々江御召出異国船防方村々手當□之并城下之道法御聞糺御巡村被成候右ニ付萬一異国船乗寄御防方御役人御出陣之焚出御用被仰付旨之願書御向方小川新左衛門等目論見小川治兵衛江及相談同人同意ニ而別紙願書寫之通可願出旨之處右之儀中々行届ふ申候ニ而御奉公之節ニ相当候様ニは候得共ふ行届御差支ニ相成候而はふ調法ニ罷成却而ふ忠之筋ニ相当可申奉存候釜数等も多分書上候得共鰯ノ粕渡世之釜ニ而魚油しみ込急之御用ニは用立ふ申候其上地引網魚屋等放々ニ而御陣屋ニは相成兼尚又人家等も極窮者多白米壹式俵も持合候者壱村ニ貳三軒程ならてハ無之候ふ用易之儀申上御手筈相違ニ罷成候而は何様之蒙御咎候哉も難斗……右願之筋双方ニ而網持共より願上候趣



小川治兵衛より与頭傳兵衛ヲ以申遣候ニ付拙者了管ニ而ふ承知共難申遣先御伺之上差出方可然と相延置申候……<sup>(23)</sup>

このように、飯高家より異国船防ぎ方御役人御出陣炊出し御用願書提出の儀については、小川新左衛門が目論見、息子の小川治兵衛が同意して決めたことであって、飯高家としては、不承知である旨を示している。この炊出御用勤めの願書は、五月になって、宿村名主網持新兵衛・組頭総代伝兵衛の連印で、再度提出されることになる。一方六月二日には、御知行所上総国粟生村・片貝村・小関村網持一同から異国船乗り寄せ御防ぎ方御出陣の節の炊出し御用を勤めるのは無理であるという願書を作成している。<sup>(22)</sup>これは、飯高家を中心とする粟生村・片貝村・小関村の網元が挙動して、宿村小倉家を中心とする四カ村網持六人の動きに反対していることを示している。ただ、小倉家を中心とする網持六人の中には粟生村の重兵衛も入っており、粟生村内部でも意見の相違があったようである。

また、十一月十五日には、豊田一郎兵衛から飯高貫兵衛に宛てて、次のような手紙が出されている。

去ル十日出之御状相届致拜見候、然者異国船見張定番人之儀ニ付小川氏江御懸ケ合有之候処挨拶之内前後相振レ候儀有之候ニ付御不安心之旨右故異国船防方御手当御用筋者御免御願被成度旨被仰越御尤之御事と存候、然處小川氏も同様之儀申来候間双方右様之願申来候旨申上候ハ、去暮網方一件之節さへ行々両家不和ニも御成可被成与 中嶋様殊之外御苦勞ニ被遊候而御双方厚く御利害有之事済迎御歛御安心被遊候處此度之儀者御役筋御身之儀ニ而殊ニ不輕御用筋御免御願与申上候而者 中嶋様御苦勞も不輕御儀ニ而早速者難申上候間今一應能々得与御勘弁之上御申越被下候程致度候間先ッ右之段申上候 以上

西十一月十五日

豊田一郎兵衛

飯高貫兵衛様<sup>(24)</sup>



この手紙の中で、「去暮網方一件」とあることから、この酉年は、文政八年のことであると思われる。文面では、直接炊出し御用については触れて居らず、異国船見張り番小屋番人をめぐる両家のやりとりの行き違いについて触れているが、飯高家と小川家の不仲について、豊田が仲裁に入り、飯高家を説得している手紙である。豊田は、在方出身とはいいながら、武家奉公の経歴が長いため、在方における利害関係をもっていなかったもので、両者の調停役としては適任であったようである。領主側にとってみてもこの両家の不仲は不都合であったはずである。

次の史料もまた、飯高家と小川家との意見の食い違いを示すものである。

……異国船見張番人之儀返人足ニ而者村々並網方迎も難儀仕候ニ付定番之願書差出候間参ヲ以御相談申上候処御同意ニ候間取継差出候処秋中宿村与頭傳兵衛弥五右衛門与請負願而度迄差出候趣ニ付四ヶ村願書相□リ右兩人与願之儀何様之分見ニ候哉拙者方江者願差出候砌も一向無沙汰拙者儀も御役之末ニ相加リ御知行村々之願出し候儀者不相弁罷在候而者勤方等閑筋ニも相當り尚又海邊之儀居村ニも差加リ之儀□蒙御役罷在候甲斐も無之□用之拙者ニ罷成候殊ニ四ヶ村願出候節態々以参御相談申上候處其砌右御咄も無之御同意ニ付漁先キニ相向漁業人少ニ罷成候而者難儀□御益ニも相抱差懸り候事与存村継ヲ以差出候所、前々請負人願在之趣始而承知仕候 右願人共江拙者方江者願筋之儀不及沙汰ニ旨被 仰渡ニ而も在之儀ニ又ハ御用向ニ不相抱もの相心得候哉 兩人存寄承糺江戸表江可申遣与存候處其御役□江者拙者ハ不相抱与も宜敷被仰渡ニ而も在之哉も難斗ニ付相伺申上度……御趣ニ右兩人并四ヶ村前々申合も在之候儀ヲ其訳も不申出願書差出不束之儀ニ候間一同召出相糺……江戸役所江可申立候得共前文之訳柄相分兼候ニ付如斯ニ御座候<sup>(25)</sup>

飯高

これは、年代がはっきりしないが、内容からみて、文政八年のものであると思われる。飯高家が、異国船見張り番人について、宿村をはじめとする四カ村が自分を無視して請負願書を提出したことに對して怒りを述べている書簡であり、前掲の書簡と一連の史料であると考えられる。文中に「請負願兩度まで差出」とあることから、この異国船見張り番人請負は、炊出し御用請負と同一のものである可能性もある。

以上にみたように、飯高家と小川・小倉兩家に代表される動きはこの件をきっかけとして大きく二つに分かれることになる。

実際、史料の記載状況からしても異国船来航から三月三十日までは、小倉家の動きが活発であったが、四月になつてからは、飯高家の動きが活発であったことがわかる。四月一日から二十六日まで、小倉家の記録はない。このように小倉家と飯高家の記録に、記載のずれや対応の違いが出て来るのもそれぞれの行動が別個に行われたためであり、もともと足並みは揃っていなかったといえる。またそれが網方出入りを遠因としているのではないかと豊田が指摘している点は注目できる。

海防体制に積極的に活動していた小倉家は、海防用の鉄砲や武器の調達についても、その対応はすばやかだった。文政八年五月十一日から、小倉家の記録に則って動きをみてみよう。<sup>(26)</sup>十一日鉄砲拝借願いについて、伝兵衛方にて集會が開かれる。これは、海防用に鉄砲が必要ということで、領主から鉄砲を拝借しようというのである。二十一日中島三郎右衛門より古鎗を買い集めるように小川治兵衛へ命ぜられ、治兵衛は伝兵衛にそれを命じている。二十一日から二十四日までの四日の間に伝兵衛は、江戸の古道具屋や商店をかけずり廻り、古鎗を百本も買い集め、中島三郎右衛門へ差し上げている。これも海防用に村人に持たせるための武器である。古鎗は、二十六日に両町奉行に差し上げられ、二十八日中島氏に下渡しとなり、二十九日中島氏から伝兵衛に預けられ、同日伝兵衛から小川氏に差し上げている。

七月二十二日勘定奉行から野方村々鉄砲拝借について問い合わせがあり、早々取調べよとの御触れがでる。これは、従来山方のほうで、猪打ち用に村人に貸与されていた四季打鉄砲の調査であり、いずれも鑑札をうけているものである。二十五日小倉伝兵衛は小川家に召し出され、野方村々鉄砲拝借の有無など村々役人に問い合わせ、書付けをとるように命ぜられている。二十六日伝兵衛は、村々鉄砲所持の次第を取り調べる。また、東金町にて鉄砲稽古開始について、東金町名主三左衛門に問い合わせている。八月二日野方鉄砲所持村々取調べの結果を小川治兵衛・飯高貫兵衛から中島氏へ差し上げる。この取調べの結果によると、いわゆる野方とは、浜付村ではない山方の松之郷・三尻・酒蔵・植草・上布田・極楽寺・瀧・丹尾・山田といった村々であった。この野方鉄砲も異国船防ぎ方に使用する目的で、調査が行われたのであるが、実際にどのように活用されたかは不明である。

ところで、これらの武器の配分についても問題が生じている。とくに伝兵衛が集めてきた古鍵百一本については、飯高家文書によると「(鍵百一本の分配について) 右者酉之四月五日村継を以渡方之儀相伺候処御下知も無之ニ付渡方差扣之宿村役所江預り置候処其後浦付四ヶ村江右村割之内<sup>(渡奉方)</sup>置申候宿村役所ヨリ相渡候<sup>(拙者方)</sup>□□方ニ而相分り兼小川江取合候処村々ヨリの請取書江戸御役所江差遣候ニ付難相分り旨申候<sup>(27)</sup>……」とあり、飯高家に断りなく宿村の役所から細谷敷・粟生・片貝・小関の四村には他村より先に分配されたことについて宿村役人と飯高家との間でトラブルがあったことが予想される。この飯高家の文書の中では、小倉家は「鉄砲打ち人之儀片貝村名主十右衛門高倉村名主友右衛門宿村組頭伝兵衛松之郷村名主甚五左衛門右四人之儀は野合村出生故猪鹿打習ひ居手馴候者ニ御座候、今少し稽古仕候ハハ打人ニ相成と可申奉存候……<sup>(28)</sup>」とあり、鉄砲打ち人としてのみ現れているのである。

文政九年五月十二日飯高家によって漁民組織プランが提示されたが、これ以降、飯高家の史料には異国船防方関係の記載がほとんどなくなっている。それにひきかえ小倉家の方はますます詳細な記載がなされていくようになる。小倉伝兵衛家は、この後、文政十一年五月二十六日、中村組頭八左衛門・高倉村名主友右衛門・宮村名主兵左衛門・粟

生村組頭伊兵衛せがれ文左衛門らとともに給知世話番中島三郎右衛門を介して、海防差配役を仰せ附けられ、名々に鉄砲一挺ずつを渡されている。<sup>(29)</sup>また、海防差配役の任命によって、従来の御触れ・御請け書の伝達経路が与力給知定年番役↓給知差配役↓各村々役人、であったのが、異国船に関しては、給知定年番役↓給知差配役↓海防差配役↓各村々役人（請け書の場合はその逆経路をたどる）となったのであり、海防差配役が情報伝達の面でも主要な位置に立つようになったのである。

以上をまとめると、第一に飯高家と小川・小倉両家の対立は、小倉家・小川家が飯高家とはまったく別々にプランを提出していくようになったところから表面化している。この背景にはひとつには前年にあった漁場出入りがあったのではないかと考えられる。また、第二に幕府の海防政策への協力についてどこまで村方で協力するのかという点で、両者の考え方は異なっていたということがあげられる。飯高家は家や村の経済を中心に考え、武家への炊き出しや番兵・人足の差し出しには消極的であった。これに対して、小倉・小川家は、積極的に幕府の政策に協力する動きを示したのである。このことは、それぞれが提出した防衛プランからもうかがえるのである。第三に、宿村組頭小倉伝兵衛が異国船問題を契機として村の組織化の政治的主導権を握り、周辺村々における地位を高めていこうとする意識があった点である。また小川治兵衛家もこの時期、経済的に困難な状況にあったと考えられ、文政九年には宿村の名主役を退役し、その子も江戸にいて村に戻る気はなく退役を申し出たので、伝兵衛が名主助役となり、実質的に名主役としての役目を担うことになったのである。また天保十一年には、海防差配役として士分にも取り立てられているのである。この小倉伝兵衛にみられるような村落上層民と飯高家のような村落上層民の性格の違いについては今後より詳細な検討が必要であるが、ひとついえることは、小倉伝兵衛が、名家の出身でありながら次男であったがために数度養子縁組みをしては離縁を繰り返し、その間、古着商・材木商などのかずかずの商いをして生活していた人物であり、その間に培った人間関係が武器の調達等異国船御用を勤める際に役立ったこと、結果的には、村役人・海防差配

役として公的権力を自己の内部に組み込むことに成功したこと、同時に、また漸く入った養子先である小倉家が当時経済的に悪化していたのをその才覚で再興し、既述のように村における経済的地位も上げた人物であるという点である。<sup>(30)</sup>このような経歴をもつ伝兵衛は、もともと九十九里浜の大地引き網元であった飯高家とはまったく違ったタイプの新興の村落上層民であるということができよう。

### おわりに

以上検討したことから明らかなように、文政期の異国船問題を契機として、少なくとも長い海岸線をもつ九十九里浜の村々においては、村方における情報伝達網が大きく再編成されようとしたことがわかる。また、この新しい情報網の編成をめぐる、村落上層民間での意見対立、主導権争いが展開し、その過程で小倉伝兵衛にみられるような新興の上層民が登場してくるのである。

ここでは、今後の課題も含めていくつかの点を指摘しておきたい。

①まず、村方の海防体制の整備にあたって、「情報」伝達網の整備から開始されている点が重要である。これは、村人からの異国船発見の「情報」伝達や、領主から村への命令の伝達を迅速にさせるために不可欠だったのであり、領主階級にとって村側からの情報提供がその行動や政策を決定するうえで、かなり重要な意味をもっていたということが指摘できる。領主側にとっては、村の情報入手するために、村落支配者である中間層を掌握しておくことが重要な課題となるのである。

②情報網の整備、警備組織として、御鷹場霞組合・臨時組合・地曳網の組織が利用されようとした点であり、また領主からの命令によってそれを積極的に推進したのは、村の上層民であった点である。とくに、地引き網の組織は、



九十九里浜の村民の経済に直接かわるものであり、彼らは、村にあっては網元・地主という村の経済的支配者であり、しかも士族の身分をもつ政治的支配者でもあるという立場から、経済的諸関係を情報網に編成するという組織化が容易に行いえたのである。また、それ以外でも地域の情報網を掌握できる立場にあったのである。

③しかしながら、海防プランをつくるにあたって、上層民がそれぞれ別個に案を考えていることからわかるように、同じ上層民でも、その中で積極的に海防を推進した小川・小倉家と、村の財政と個人の経営を第一に考え、それ以上の海防協力を拒否した飯高家との二つのタイプがみられ、村々における意見の統一は難しかった。また本稿では触れなかったが、それに加えて新たに弘化二年にはより広域を対象とした組織の編成のため新たに九十九里浦取締役といった役職が幕府代官から一方的に設置されたのであるが、海防差配役など旧来の役職との摩擦が生じるなど、村落上層民間の意見や行動の統一はますます困難となったのである。領主側にとってみれば、異国船来航の情報伝達も含めて海防体制を徹底化させるためには、この上層民をいかに組織化できるにかかっていたのであり、村落上層民同志の意見の対立は不都合なものであったと考えられる。

④なぜ村落上層民が領主からの御触れに対してこのように迅速に対応ができたのかという点については、以上にのべたような村落上層民の村の政治的・経済的立場・役割にもよるのであるが、それ以外の要素として、村落上層民の情報収集能力の問題がある。異国船防御プランをたてるに当たってもっとも敏速に対応した小倉伝兵衛の場合をみると、寛政七年三月十八日、父の従兄弟で江戸御浜御殿前旗本用人頭高宮織右衛門が蝦夷地御用を仰せつかった時に、侍不足のため勧誘された事実があり、このとき既に、異国船来航にともなう幕府の北方警備については知っていたと考えられる。また、文化五年には長崎における異国船来航情報を旅先で入手している。したがって、村落上層民個人ではかなり早い時期から、その人間関係や行動半径の広さから異国船来航とそれに伴う社会の動きを知っていたことになる。小倉伝兵衛が文政八年に「異国船打ち払い令」が幕府から出され、実際に九十九里浦に異国船が来航したと

きにもすばやく対応できたのは、既にそのような社会情勢を察知し、危機意識を抱いていたためであろう。このように上層民の情報収集能力は、それぞれの行動を決定する上で、大きな意味をもっていたのである。また、その情報収集能力が、公的権力の自己への組み込み、政治的社会的経済的地位の向上のために大いに活用されたことも注目すべきであろう。

⑤幕府領主による「情報」操作の問題である。九十九里浦の場合でみたように、幕府・領主が意図的に、異国人を悪人のように伝え、ことさらに恐怖心と敵愾心を煽ろうとした点は重要である。公的な「情報」網を使って、このような情報が伝達されることは、村民の意識に与える影響は大きいといわねばならない。しかしながら、この幕府の意図が必ずしも貫徹しなかったことは、村落上層民間における意見の違いからも知ることができる。また今後は、プランのうえで村落上層民に動員されることになっていった一般の村人が、実際はどのように動いたのか、彼らの意識はどこにあったのかということについても検討する必要がある。

# 註

(1) 近年のものでは、九十九里関係では、山口徹氏「九十九里地曳網漁業経営帳簿の組織と性格——経営帳簿の語るもの——」(『歴史と民俗』3、一九八八年七月)、同「房総の海と生活——九十九里浜の鰯漁を中心に」(『歴史と民俗』4、一九八九年七月)、同「近世的雇用の一断面——地曳網漁業を中心に」(『歴史と民俗』5、一九九〇年七月)、同「近世のいえ」(『日本の社会史』6、一九八八年六月)などがある。

(2) 浅倉有子氏「江戸湾防備と村落——相模国を中心に」、木村哲也氏「浅倉報告コメント——外庄期の地域秩序をめぐって——」(『関東近世史研究』31号、一九九一年十月)などがある。



(3) 与力は、南北両町奉行を頭として、南北各組に十五人ずつ抱えられており、一代限りであるが、禄高としておよそ二百石をあてえられていた。この禄高を支給するために上総・下総両国に約一万石の領地が設定されており、それぞれに南北両町奉行与力給知と呼ばれ、南に二十九村、北に二十九村が設定された（『九十九里町誌』）。本稿で主としてとりあげる粟生村・宿村は北町奉行与力給知であった。与力給知では、毎年一年交代で与力の中から給知定世話番として南北両組それぞれ各二人ずつ選ばれ、江戸役所にあつて年貢の収取、給地の取り締まり、御触の伝達、農民の意見書の上申など、給知の管理・事務を行っていた。一方村方の方では、上層民の中から南北各組三～四人を選んで給知差配役という士分を与え、給米を与えて人別からはずし、苗字帯刀を許すなど、武士に準ずる身分を与え、在地代官としての職務を行わせていたようである。北町奉行与力給知の場合は、四～五人の給知差配役が任命され、その内一～二名は在府代官として、江戸にいて村との連絡をとり、村の方は在地代官が事務をとっていたのである。そして、地元の代官として、領主のかわりに年貢の収取・お触れの伝達・村方支配を行っていた。これら給知差配役になるような上層民は各村では名主クラスであったのであり、従つて、村で本来名主が行うはずの職務は組頭が代行していたようである。例えば、宿村の場合、名主は代々小川家であったが、小川家が給知差配役となつて以来、村政の実務は組頭である小倉家が行っていたのであり、村政にかかわる史料はほとんど小倉家に残されている。北町奉行与力給知の差配役は、年によって多少変化があるが、文政期では粟生村飯高貫兵衛・飯高総兵衛・宿村小川治兵衛・豊田一郎兵衛・豊田重三郎の五人である。飯高家が差配役となつたのは安永八年が最初で、その後文政三年からは毎年名を連ねている。飯高貫兵衛・総兵衛は親子である。小川家も、安永九年から差配役となり、代々勤めている。小川治兵衛は文化二年から差配役となつた。

(4) 文政八年三月二十六日は「千葉県山武郡九十九里町誌資料集」（以下「町誌資料集」と略す）No.423、文政九年二月十日、天保三年四月二十七日、同年五月九日、同年六月十八日は小倉家文書「異国船渡来一件書拔」、弘化二年二月二十九日は「町誌資料集」No.442、443、弘化三年六月八日は「東金市史 史料編一」参照。また、文政九年は五月十日にも異国船通過の記録がある（「東金市史 史料編一」）が、二月十日のものと同一の可能性がある。なお、房総沖の異国船来航と諸藩の動きについては、針谷武志氏「佐倉藩と房総の海防」（『近世房総地域史研究』一九九三年十二月刊）、『内憂外患』への領主的対応

の挫折と変容」(『一九世紀の世界と横浜』一九九三年三月、横浜開港資料館横浜近世史研究会編) などがある。

- (5) 「町誌資料集」No.423
- (6)(7) 小倉弥男家文書
- (8) 小川家文書「文政八年酉四月 乍恐以書付奉申上候」(九十九里いわし博物館所蔵)
- (9) 「珍奇異聞」文久三年(国立国会図書館所蔵)
- (10) 「町誌資料集」No.423、飯高家文書(九十九里いわし博物館所蔵)
- (11)(12) 飯高家文書(九十九里いわし博物館所蔵)
- (13) 小倉弥男家文書
- (14) 文政八年「異国船粟生浦江相見候節始末書日記」(小倉弥男家文書)
- (15) 片貝村霞御鷹場組合は、上総国山辺郡十文字五郷、同郡小関村五郷、同郡田中新生村五郷、同郡粟生村五郷、同郡西野村五郷、同郡片貝村五郷、同郡吉田村五郷、同郡長柄郡粟生野村五郷、長柄郡萱場村五郷、山辺郡九十根村五郷、山辺郡小沼田村五郷、長柄郡清水村五郷、山辺郡真亀村五郷、山辺郡上谷村五郷、の五十カ村である。
- (16) 臨時組合は、妻木竹治郎知行所山辺郡真亀村、森覚蔵御代官所山辺郡広瀬村、榑原主計頭与力知行所山辺郡宿村・細屋敷村・粟生村・片貝村・小関村・八川村・大徳村・中村・上武射田村・高倉村・三浦村・宮村・堀内村・関内村・三門村・薄嶋村・幸田村、筒井伊賀守組与力給知同郡不動堂村・西野村・貝塚村・藤下村・関下村・殿廻り村・中野村・宮村・田中新生村・大沼村・宿村である。他二村は虫食いのため判読できなかった。
- (17) 小倉弥男家文書
- (18) 小倉家文書「異国船粟生村へ相見候節始末記」(『東金市史 史料編1』七八一)
- (19) 小倉家文書「東金市史 史料編1」八〇四
- (20) 飯高家文書「異国船乗寄候節手当之儀ニ付申上候書付」(九十九里いわし博物館所蔵)
- (21) 小倉家文書 文政八年三月「異国船渡来一件之書拔」(小倉弥男家文書)

- (22) 小倉家文書「東金市史 史料編1」七九〇～九一
- (23) 飯高家文書「町誌資料集」No.423
- (24) 飯高家文書「町誌資料集」
- (25) 飯高家文書(九十九里いわし博物館所蔵)
- (26) (14)と同じ。
- (27)(28) 飯高家文書「町誌資料集」No.273
- (29) 小倉家文書「東金市史 史料編1」七九一
- (30) 小倉家文書「(小倉伝兵衛一代記)」  
「小倉伝兵衛一代記」が収録されている手記は、明治五年七月に伝兵衛の息子弥兵衛が書き記したもので、「大日本皇代・地方根元廉有様ヲ記 小倉傳兵衛一代記」と題されている。おそらく伝兵衛の書き残した日記等を抜粋しながら筆写して作成したのではないかと考えられる。
- (31) 「東金市史 史料編1」八三四～四四
- (32) (30)と同じ。

\* 九十九里いわし博物館館長田村敬氏はじめ館員の方々には十数年に及ぶ調査の御協力を得た。また、小倉弥男氏には史料の閲覧をはじめ、数々の御配慮をいただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

(いわた・みゆき 日本近世史)